

「以上」の対義語

須山名保子

ここに日本語を習っている外国人が一人いて、次のような作文を日本語の先生に示した。

鉄道がストなので、学生は三十人以下来しました。

私は東京に八年以下住んでいます。

本店から皇居まで十五分以下かかります。

与えられていた課題は「以前」「以後」「以上」「以下」であった。「以上」まで満足して読み進んで来た先生は、「以下」の不成績に当惑した。生徒の方はむしろ昂然としていた。これらの「以下」は「以上」におきかえられるし、「以下」は「以上」の反対語ではないか――。

「段階・程度・数量などに関し、それを含みそれから以下。↑以上」(岩波、国語辞典第二版)「いか(以下)それより下。いじょう(以上)それより上」(東京堂、反対語大辞典)というような国語辞典の記述を見ると、なるほど、八年に満たない年月を「八年以下」と表現してよいと思った外国人生徒を責めるわけにはいかない。

大体1か国語辞書というものは、その国語の native speakers

が自分にとってむずかしい単語や表現を引くためのものだから、やさしい基礎的単語の意義素を厳密に記述する必要はない。そんなものがなくても native speakers はそれらの単語の意味をよく知っており、それらを自由自在に使用することができるからである。(服部四郎『英語基礎語彙の研究』四ページ)

さればこそ外国人の誤用や幼児の懸命な表現は、しばしば国語のしくみのある部分を、新鮮な姿で問題にして見せてくれる。「以上」「以下」は、『分類語彙表』(国立国語研究所編)で*印がついており、使用頻度の高い語である。日本語の先生が、どういう方法を用いて生徒の正しい理解をひき出したか、という問題はいま措いて、私は右の作文の誤りをただすことがかりに、いくつかの言葉の意味の正確な把握を^{注3}目指し、語の対義関係の問題にも及んでみたいと思う。

二ノ一

鉄道がストなので、学生は三十人^{足らず}以下来しました。

「学校に来た学生の数は三十人に達しなかった（あるいは、満たなかった）」というような滑らかな文への言いかえもあるが、いまなるべく語順を動かさず語の増減も避けて、問題の「以下」を他ととり替えることだけを心がけると、「足らず」が当てはまる。右の文の前半は学生数の少ないことの原因を述べているのだから、三十人という数は少ないという面からとらえられているはずである。「足らず」は左に掲げる諸例から帰納されるように、ある数にまでならないが、その数に近いということ、少ないと受けとっている例、(B)は、その少なさに話し手が価値を認めている、満足している例、(C)は(少なくとも、その文の中だけでは)(A)(B)のどちらでもない、感情の表現は認められずただ数量を述べている例である。

(A)まだ半分足らずしか書けていません。

まだ預金は二十万足らずです。

三年足らずの経験では、大きなことは言えません。

(B)ゆっくり歩いて七味まで二時間足らず。

たしか、千円足らずで買えると思います。

(C)結婚してまだ三か月足らずです。

この(A)(B)(C)の三つの別が、「足らず」の意義特徴を考える上に必要か否かは後に触れるとして、三つの内のどれに当たるかによって、文の中の前後の表現に多少の異同が生じるのは確かである。「学生は三十人足らず来しました。」にまだ残るいくらかの不自然さは、状況から(A)に属すると思われるこの文に、(C)の中間的表現がなされていることで、この文は、

鉄道がストなので、学生は三十人足らずしか来ませんでした。と、否定的表現をとることによって初めて話し手の意図が明確にされたとするべきであろう。

足らず
近く
私は東京に八年以下住んでいます。

この文の中には感情を表わす部分が見出だせないで、「足らず」におき替えて(C)に属する文とすることができる。ただ、ここにも一つの考え方をする余地がある。それは「八年」に近い居住期間を長いと把握することであり、話し手は八という数量の多いことが言いたいのではないか、ということである。その場合は「近く」が替わらねばならない。前に倣って「近く」も三種類に分けて用例を挙げるならば、次のようになる。

(A)一千戸分に七億円近くかかる。

老人と子どもがことしも二百人近く死んでいる。

一時間近くもまったのに、あの人は来なかった。

遠い所では二十キロ近く歩かねばならない。

(B)取引高も比較的多く、……合わせて一億ドル近くにのぼったとみられている。

もう半分近く来ましたよ。

(C)東京に来て二年近くなる中で、この夜は一ばんすばらしい夜でした。

この都市には一千万人近くの人に住んでいる。

「近く」は、ある数量にもう少しでなる数量を、多いという見方でとらえている。こんなに多くてはたまらない、と訴えることも、こ

んなにたくさんで嬉しいと喜ぶこともできる。そして沢山の例を見ると、(A)(B)どっちつかずの、感情を盛り込まない叙述は実に少ない。これは「足らず」にもいえることであって、我々は数量の多少を話題にするとき、多くの場合、それに対する自分の都合からの感情を表出したいものらしい。「八年近く住んでいます」という報告よりも「もう八年近くも住んでいます」という感慨に接することの方が多い。たとえば官庁への提出書類のような中間的な文を要求するものに七年十か月、七年十一か月といった八年に近い期間を月を省いて書く場合は、約八年という表現が(八年より少し多い場合もあるという意義のずれをおさえても)採用されるであろう。

本店から皇居まで十五分

足らずで行けます。

以下かかります。

近く

以内で行きます。

本店から皇居までの所用時間を、短い、少ないと把握すれば「足らず」、長い、多いと把握すれば「近く」が適することは、前の二つの文で扱ったとおりで、更めては説かない。ここでは「かかる」という語を放っておけない。「かかる」は時間について単に所用量を示す(英語の *It takes...* のごとく)のではなく、その所用量を負担に思っている意も持っている。(経費にいう「かかる」も同じで、負担になる量をいうのに用いられる。)(「たった」十五分足らずで「ならば「行けます」と被修飾部を変更したのはそのためである。

所用時間については「以内」もしばしば使われる。これは「足らず」「近く」とは異なり、ある時間(距離も)を限度にその内側全

体を指すのが本義であって、(D)にまとめた例文が、それである。
(D)危険ですからここから五メートル以内では、たばこをすつてはいけません。

「原因と結果は十キロ以内にある」との「安全工学上の常識」を出発点に……

郊外マンションは都内まで一時間以内の国鉄、私鉄各駅の周辺でふえはじめている。

三年以内には帰国するつもりです。

限度が表現されることから、内側の中でもその限度の近くに注意がかたよることが起こり、そのとき「以内」は「足らず」「近く」とある意味を共有するようになる。(E)として集めたのがそういう例で、課題の文の場合も(E)に入る。

(E)三十分以上なら困るけれど、三十分以内にはできるなら、待つわ。

三十秒以内にお答えがないと、ブザーが鳴ります。

十番以内に入れたのですもの、満足しなくちゃ。

「以内」の文にもまた不満・満足・中間のどれもあり得るが、前二者に比べて中間の度合が高く「行きます」という表現が不自然でない。

二ノ二

なぜ「以下」では誤用なのか、「以下」はどんな文脈で用いられるのか、という二つの面を持った一つの問いは、すなわち「以下」の意義は何かという問いである。

いま数量を表わす(あるいは数量に相当する)語に接する場合に

限って、「以下」の意義特徴の中心的なものを考えてみよう。①数量を表わす語に接続する。②その数量を上限として、それより小さい、少ないことを示す。③小さい方へ向かう力——かりに下降性とよぶ——は、本来無限を目指す。ただし、日常の生活の中では、ゼロが下限となることが多い。用例を次に掲げよう。

五十点以下は落第です。

出席者が三十人以下では、この会は成立しません。

建物価格の二分の一以下に相当する建物の一部が滅失した場合

……。

冬はさむくてれい度以下になることがある。

全商品小売の半値以下、ヤスイ！ ヤスイ！

作柄は平作以下であった。

その場で整備士が基準以下にエンジンを直してやった。

次のような例は「以内」との差異の検討をうながすものである。

視界が十キロ以下となった場合の計器飛行コースとなった。

さきに「以内」の例を探したときも、実はこういう例文を得ている。

このはかりでは一キログラム以内のものしかはかれない。

五つ以内ならどれでもいいです。すきなものをえらんでください。

い。

この「以内」は従来は「以下」あるいは「まで」と言われたものであろう。私にはまだ抵抗感があって使えないが、今後はふえてゆくものなのかもしれない。「以内」は「以下」と異なっている原点があり、その原点を中心に円を描いたその内側全体が「以内」なのである。その円の半径の一つが、「以下」の存する軸と重なるとき

に、右のような用法の重なりが現われるのである。「以内」の限度は、上限というような一つの軸の上の位置に限られない。

「視界が十キロ以内」といいかえると、その十キロの円の中で起こり得ることが表現されようとする。例文の「十キロ以下」は単なる制限であり、この場合はたがいに通用しない。

さて数量に接する場合の「まで」もここで「以下」と比較しておきたい。

「まで」はある数量を上限として「以下」の下降性とは反対の上昇性を持つかに見える。

もうこの子、二十まで数えられるのよ。

二十日まで待って下さい。

ところが「まで」には下限もあり、そのときは下降性が働くかのようである。

気温はついに零下二十度までさがった。

実は「まで」には方向性はあるが、それは下降性、上昇性というような一つの軸の上のものではない。更に「以内」の円のような一定した形も描かない。それは数量以外の語に接する場合を見れば明らかとなる。上に接する語の間にきまつた位置関係がないのである。

青いボールを買ってあげたのに、赤いのもで欲しがるの。

苦痛は両手両足にまで及んだ。

私までおほめにあずかって光榮です。

ここで数量以外の語に接する場合も含めて、他の語に接する「以下」について、まとめておこう。

①「接続」数量・序数・序列を表わす名詞、価値や能力など程度

の判断の対象となる意義特徴を持つ名詞（まれに形容詞^{注6}）にく。

②〔指示〕上接する数量を上限として、より小さい・少ないこと、序数・序列・程度を上限として、より低いことを示す。この軸の上の downward きの方向性を下降性とよぶ。

③〔下降性〕数量に関して下降性は本来無限であり、序列に関しては事柄の性質上有限である。

十一位以下では決勝大会に出場できない。

この辺は中流以下の家庭が多い。

課長以下全員反対です。

これ以下^{以下}の答案が沢山あるんだから情無いよ。

④〔近似性〕文脈によっては下降性よりも、上限との近似性が注目されることがある。

こんなにいい品物は、どんなに安くても二千円以下^{以下}ということとはないでしょう。

あいつは猿以下^{以下}だよ。

三ノ一

「以上」は「以下」よりも広い範囲にわたる意味用法を持つことが予想される。たとえば接統の面でも次のように文の上接するものがあり、これらは意味の上からも「以下」が対立し得ないものである。

私があの人を思う以上^{以上}に、あの人は私のことを思っていてくれたのです。

気の毒な患者さんたちが厳として存在する以上^{以上}、この機会にキ

ツバリ決着をつけ……。

前者の副助詞的な用法は、反対の意味を表現しようとするれば、「思うほどには……思っていてくれなかった……」と、同等を打消す形をとって、それより下を包含する。いわば上向き^{上向き}の事柄とその反対とは、表現の仕方に均衡を保たないことはまま見かけることである。後者の接統助詞の用法が生まれたのも、「以上」の積極性が働いている。上接の文の事柄が、決定的推進力となって下に続く判断をよび起こしている。進むのみで退くことはできないのである。諸辞書では、「……から(に)」とたがいに言いかえあっているが、「……から(に)」は下に続く判断をのっぴきならなくさせた、密着した理由を示す、と称すべきものであろう。

人間生活にサイクルがある以上^{以上}、マイホームもそれに合せて住み替えるのが理想的。

現に義務教育で切捨てられる者がいる以上^{以上}、「夜間中学」は存続拡大すべきである。

そこまで思いつめた以上^{以上}、もうしかたがない。

「以下」と対照させつつ「以上」の用法を整理することに進もう。

①〔接統〕数量・序数・序列を表わす名詞、価値や能力など程度の判断の対象となる意義特徴を持つ名詞・形容詞につく。

②〔指示〕上接する数量を下限として、より大きい・多いこと、序数・序列・程度を下限として、より高いことを示す。この軸の上の上向き^{上向き}の方向性を上昇性とよぶ。

③〔上昇性〕数量に関して上昇性は本来無限であり、序列に関し

ては事柄の性質上有限である。

①②③のための用例。

六才以上は有料です。

珠算三級以上、英語の理解力と経理に興味ある方。

高卒以上、三十才まで。

実力以上のことをしようとするから無理が出る。

予想以上のでき高。

予想以上の被害を蒙った。

単なる友達以上の関係になった。

④〔近似性〕文脈によっては上昇性よりも、下限との近似性が注目されることがある。

伊豆七島青ヶ島への船が一カ月以上も欠航している。

学部ひとつ作るのに百億円以上かかり……。

三日以上は待てませんよ。

一カ月を越してしまった、ということ、少なくとも百億円はかかる、三日間だけは待つと言いかえてよく当てはまるところである。この近似性は「以下」にも認められたが、「以上」の場合の方が③に対する割合は大きい。そしてそこに「以下」との対照の均衡がくずれるものとが認められそうである。

三ノ二

半年から一年余り使っているうち動かなくなってしまう……。

八〇％を越す投票率のうちに……他地区では九〇％台を記録したといわれ……、

民間の計算センター委託が六割を越える。

半世紀余前（五十四年ぶり）、故郷松山から米國へ行く途中に……。

昨年八月ごろからつかまるまで約一年三カ月にわたって……。

たとえば「七ヘクトール以上の田」というところを、右の例文の傍線の表現を使って言いかえることは、ある程度できる。特にその「以上」が④の近似性を負っている文脈であれば、品詞も同じ「七ヘクトール余り」との差はちぢまる。

それは、畑なら十二ヘクトール以上、田でも七ヘクトール余りをつくっている模範的で意欲にみちた大農家にきまっていたが……。（杉浦民平の朝日新聞への寄稿文）

書き手に「余り」を使わせたのは、「以上」を重ねて用いるまいという修辭上の考慮であつたであらう。軸の上の線の重なり合いがあるので、こういう言いかえも可能になる。しかし「余り」には方向性が全くないことが「以上」との差異を——いくらちちんでも最後には間隙がある——決定的なものにしているのだ。

序列や程度はしばらく措いて、ある数量より多いことを示す語、その数量のあたりを指す語、より少ないことを示す語のいろいろを並べてみよう。

多	間	少
以上・余り・余・台・強・から・より上・を越える・を越す・を上回る	ほど・くらい・ばかり・あたり・程度・前後・約・をくだらない・にのぼる・というところ	以下・未滿・以内・足らず・近く・弱・まで・より下・にならない・に足りない・に満たない・に近い・を下回る

同じ枠の中の語は、多くの重なり合う意義特徴を持つと同時に、さまざまな種類の、いろいろな程度の差異を保ち続けている。先に挙げた量の把握の仕方の違い（「足らず」と「近く」、方向性の有無（「以上」と「余り」）などの他にも、文体的レベルの違い（「余り」と「余」、存在している部分に注目するか、欠けている部分に注目するか（「に近い」と「に足りない」）、の違いなどもある。更に品詞の違いや接続の対象の範囲などから、数量に関するより他の、その語の意義特徴に及べば、類義関係、対義関係のしくみが少しずつ明らかになってゆくであろう。この表に挙げた語全てについての追及を今後の課題にしなければならない。

四ノ一

以下△ある数量・程度を上限として、それより少ない方へ向かう

ことを示す（それより少し少ないことを示し得る）△

足らず△ある数量より少し少ないことを小さいと思つて示す△

近く△ある数量より少し少ないことを大きいと思つて示す△

以内△原点からある数量までの範囲を示す△

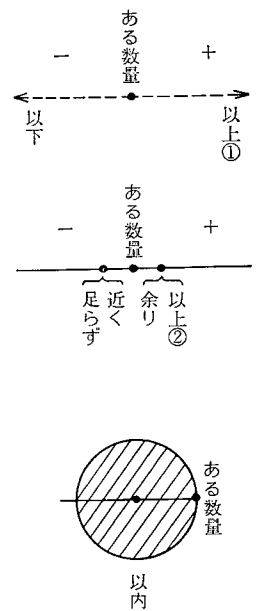
以上△ある数量・程度を下限として①それより多い方向へ向かう

ことを示す ②それより少し多いことを示す△

余り△ある数量より少し多いことを示す△

二及び三で考えたことをなるべく簡略にまとめ、また図示してみた。△△内は意義素の記述を目指しているが、「近く」「足らず」

「余り」はみな「以上」「以下」との比較のために数量に接する場合の面しかとりあげていないので、不全なものである。たとえば、「近く」は△A・B二点間の距離の少ないことを示す△ということ



を基にして、A・Bが二つの数量（一つの軸の上の二点）に当てはまる場合であり、しかも別の要素が加わっている。右の図は、どの語にも共通な△ある数量につく△という特徴をもとにしているわけである。

最初の問いは「以下」は「以上」の対ではないのではないかと、いうことであったが、これまでの分析によって、「以上」と「以下」とはその根本的な意義特徴がよく対をなすことが更めて確認された。そして「以上」に生じた第二次的な特徴は「以下」においては未発達であり、その位置に「足らず」「近く」などがある。「足らず」「近く」は根本的な特徴において明らかに一致を見るのであるが、たがいははっきり対をなす部分もある。

「足らず」「近く」は「以上」の②にさきだつては「余り」と対をなしていたと思われる。

「以内」は語の形から見ると「以外」といかにも対をなすかのどとくであるが、意味の上ではほとんど関係がない。「以外」は事物・行為・状態のいずれについてもいい、そのいづれをも事柄とし

てとらえる。とらえ方に「以内」の持つような線や円に比べれば事柄は点である。▲ある事柄を除いたほかを指す▼

五間以上七間以内の家を探している。

駅から十分以内のところに家を探しています。十分以上では困ります。

「以内」は「以上」と右のように組んで現われるが、「以上」がある場合は「以内」の内側であったり外側であったりして一定しない。「以上」の下限が「以内」の原点(中心点)であったり、円周上にあたりするのだ。

四ノ二

いままでしばしば「対をなす」「組む」というような曖昧な(定義を持たない)表現をとって来た。ここでは類義語、対義語の規定を手がかりに、ことばを整理してみよう。

類義語の認定の基準として次のような二条件を作業仮説として立てる考えがある。

(1)二つ(以上)の語のさしているものと同一(に近い)か。

(2)それらのさし方・とらえ方において明らかな違いはないか。

これは(類義語の)調査の対象として大量のことばの中から語をえり出すための条件であると考えられる。今は、次のような指摘(注)の方が我々には有益であろう。

低温を表わすということとは、「さむい」と「つめたい」との違いを問題にするかぎりには、まったく顧みる必要のない共通点だが、「さむい」にとっても「つめたい」にとっても、意義特徴の束の中の重要な一つと認めねばならぬ。「さむい」と「つめ

たい」とが類義の関係にあるということは、意義特徴の重要なものが共通であるからこそ言えることであり、意義特徴のすべてが共通であるからではない。(略)類義の関係にあると言っている語と語との間には、両語の意義を異なつたものたらしめている対立的な意義特徴というものは必ずである。(略)その点からいうならば、類義語はある意義特徴に関しては対義語である。(略)その意義特徴がこれらの同範疇語彙にあつては、より重要度の低い、いわば下位特徴であることを意味するであろう。上位特徴はやはり二者択一のものであるべく、低温にも高温にも通用、などというのがないその特徴が、やはりこれら同範疇語彙の意義における、第一優先特徴であろう。したがって一般にある語の対義語を考える場合、第一優先意義特徴において対立の関係にあり、第二優先意義特徴以下はすべて共通の関係にある、というようなものを、理想的な対義語と認めてよいのではないか、ということが十分に考えられる。

対義語については次のような規定の試みもある。

同一言語内の同一品詞で、しかも意味的にも同一の条件にあるとみとめられる語が、或る一点に関してだけ対照的な意をなっているときとめられるときに、二つの語はたがいに対義語である。

さて「以上」①と「以下」とは対義語である、と言おう。二で上昇性と言いつ下降性と言つた、全く反対の方向に働くことが「以上」「以下」の第一義的特徴であり、しかもその性質は一つの軸の上の一点を共有しているのである。「以上」②の場合はどうか。「以上」②の対義語に「足らず」「近く」を擬してその条件を考えると、ある

数量に近接していること、すなわち△少し△と表現されている点での共通の特徴を持った上で多い少ないという対立があるが、やはり多い少ないという点が上位特徴である。「以上」②と「余り」にあっては、△少し多い△という共通基盤がまずあって、次に三ノ二では方向性の有無ということで説いた対立が見られる。それならば「以上」②の方向性は「以上」①の上昇性とはどういう関係にあるか。①の上位特徴が②にあっては弱められた形で残っているのだ。意義特徴の排列の方法や移動のとらえ方などが、この問題に関して未だ整理の足りないことを痛感せずにはいられない。

「以内」の場合の「以下」などとの意味の重なりあいだが、共通基盤としてとらえられるものか、「以内」と「以上」との組合わせに對義関係といえる対立関係があるかは問題の多いところである。

五

「以下」や「以上」を考察の対象にしたのは一外国人の誤用という偶然がきっかけであった。語の意義のしくみを覗くための窓としては、これらはかなり小さなものである。もっと適当で効率の高い窓があるはずである。少なくとも大小関係を表す形容詞・名詞等にまずとりくむべきではなかったか、と思う。大小・多少の扱え方が言語表現の上にとどのような特色を現わすか、数多くの心惹かれる問題が、その窓からはのぞまれると思う。(一九七一・一〇)

注1 私には二歳三か月の女の子があるが、その文字通り舌足らずの言葉は、発音の面でも、文法的面でも大きな興味をひく。たとえば動詞をめぐって次のようなことがある。最初に獲得したのは依頼内至命令の言い方である「……して」の形である。次が「……した」。これは「絵が」かけた。「探している玩具が」あった。

注2

注3

注4

注5

というように実現をしつかり受けとめる使い方である。そして次に問いかけて対する返事として打消しの表現を始めた。親が「行かない?」と聞けばおうむ返しに「行かない。」と答えるが、「行く?」「見る?」には「行く、ない。」「見る、ない。」と答える。更に「有る?」と聞かれると「有る、無い。」と言う。そのつど訂正されるにもかかわらず、ここ半月ばかりこの形に固執している。使役の形や他動詞も知らないのだから、先ず知っている動詞で言うてのける。「ベッドから」おりて(オロシテの意)。「テレビを」見て(ミセテ)。「(服を)脱いで(ヌガセテ)」「(電灯を)消えて(ケシテ)」等々。また「書けた」「取れた」と可能動詞を使う場面が多いためか、「書けて」「取れて」と命令の形を作り出して、いく度かの訂正でこの頃言わなくなりつつある。少ない語彙を多くの事柄に応用するから、戸を開けることで覚えた「開けて」を、当初は脱衣にもみかんの皮をむくことにも使った。しかしそういう語彙の面のことは、訂正されるとすぐ新しい単語を飛びつくように獲得して、直る。

ここでは「単語の意味」という表現をとっているが、「意味」に関する根本的な考え方は、服部四郎先生の「意味」(『岩波講座哲学II 言語』)に拠りたい。

對義語について正面からとりくんだものには宮地教子氏の「對義語の消長」(『國語國文』第三七卷第七号)、「對義語の条件——高しを中心として——」(『國語國文』第三九卷第七号)があり多くの示唆が得られる。参考書も右に詳しい。また渡辺梨氏の「語彙教育の体系と方法」(『講座 正しい日本語 第四巻 語彙篇』明治書院)には對義語の扱え方について傾聴すべき論があり、のちにも引用する。

例文は、『朝日新聞』「外国人のための基本語用例辞典」(文化庁)からとるほかに、友人西尾圭子、宮崎茂子の両氏にインフォマントになつてもらつて集めた。両氏は、親の世代から東京山手暮らしであり、言語感覚の優れた人たちで、現在外国人のための日本語教育に携わつておられる。一にかかめた作文の例も、西尾氏から示されたもの。

その数量自体を含むか含まないかは、一定していない。日常の会話では含まれないことが多い。数量の境界を厳密にしなければな

らないときは、次に示すように「未滿」と替わる。

三十人以上なら団体になりますが、三十人未滿では団体のとり扱いはしかねます。

十八歳未滿はお断り。

注6

いわゆる形容詞、形容動詞を一括して私は形容詞とよぶ。三尾砂氏、『話しことばの文法』（法政大学出版局）の考えに近いもの。

注7

松尾拾・西尾寅弥・田中章夫『国立国語研究所報告28 類義語の研究』（秀英出版）

注8

注3の渡辺実氏の論文。

注9

注3の宮地敦子氏「対義語の消長」三一ページ。